

学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者

伊藤秀真

論文題目

寂円禅師研究

(論文内容の要旨)

福井県大野市に位置する宝慶寺は、寂円禅師によって開かれた寺院である。寂円禅師の法を嗣いだ義雲禅師は、宝慶寺二世・永平寺五世中興である。義雲禅師以降の永平寺住持職は、義雲一曇希一以一と次第し、三十八世緑巖巖柳に至るまで、寂円禅師を派祖とする寂円派によって独占されている。つまり永平寺は、寂円派によって長く護持されていた寺院ということになる。寂円派が永平寺に与えた影響について考察することは、曹洞宗僧団が形成されていく過程を捉える上で、検討しなくてはならないテーマと言えるであろう。

ところで現在、宝慶寺を開いた寂円禅師のことが記載されている史料は、あまり遺っていない。それは、寂円禅師が禅を修行の中心としていたため、言葉や文字で教えを遺さなかったからであるといわれている。宝慶寺は天正の兵乱に遭い、この時に多くの文書等が焼失したことも、その要因として考えられることであろう（ただし兵乱により灰燼に帰した事実については不明で、天正大地震によって被災したことが関係しているとも考えられる）。このようなことから、寂円禅師は、後世、没蹤跡の人物とも称されている。

本論文は、寂円派の派祖である寂円禅師が、如何なる人物であるのかを究明することを目的としている。本論文は序論・本論・結論の三つによって構成され、序論の前には凡例を、結論の後には資料を付けてまとめたものである。以下では、本論（全四章）において究明した事柄を中心に、概略を述べることにする。

第一章では、寂円禅師と義雲禅師に関する伝記史料について論じた。

はじめに、寂円禅師の伝記史料の所在を明らかにした。先述したように、寂円禅師に関する史料は少ない。義雲禅師の史料にも寂円禅師のことが記載されているので、義雲禅師の史料についても併せて取り上げた。

宝慶寺には『宝慶由緒記』が所蔵されている。これは、宝慶寺十四世建綱が著したとされる、宝慶寺の開創について纏められた史料である。建綱は十五世紀の人物である。

宝慶寺所蔵「永平寺後住相続=付願書」と『宝慶由緒記』に記述されている「銀椀峯」の地名（山名）は、近世以前には用いられていない可能性がある。それならば、『宝慶由緒記』は十五世紀に成立したとは断定することができない。『永福面山和尚広録』と「永平寺後住相続=付願書」、『宝慶由緒記』の三史料には共通している字句が多いことや、牛と犬の伝承についての記述があること等、共通した内容が含まれていることが認められる。それらの点から『宝慶由緒記』は、江戸時代以降の史料である『永福面山和尚広録』と「永平寺後住相続=付願書」を基にして成立したことが推察される。

ところで、寂円禅師と義雲禅師の伝記史料は、『義雲和尚語録』の上巻に収録されている上堂語等を引用して成立していることを指摘した。これは、両師に関する記録が少ないことから、伝記内容を膨らませた可能性がある。義雲禅師の語録からの引用については『延宝伝燈録』を除き、義雲禅師の行状と上堂を行った場所とが対応していた。更に『日本洞上聯燈録』の義雲禅師章は、宝慶寺三十世龍堂即門が著した『義雲和尚略伝』を踏襲して纏められたことについて、両史料を対校して証明した。

第二章では、寂円禅師の行状と寂円禅師の人物に関する伝承を論じた。

寂円禅師の伝記史料に記録されている寂円禅師の行状について概略をまとめると、出生して来朝するまでの宋国での動向のこと、来朝した後、懐奘禅師に嗣法するまでのこと、宝慶寺の創建について、そして示寂に至るまでという主に四つの事柄が中心である。この章では、次章で展開する宝慶寺の創建のこと以外の三点について論じた。

寂円禅師の出生と示寂については、江戸時代以降の記録が遺っているだけである。つまり、寂円禅師が宋国人であると伝えられていることや、出生・示寂に関することは、江戸時代以前に遡る史料がないことから、寂円禅師が宋国人であるとは断定できないのであり、日本人である可能性をはらんでいる。

寂円禅師の嗣法については、寂円派の三物や伝記史料によって、その多くには寂円禅師が懐奘禅師の法嗣であると記載されている。伝記によれば、寂円禅師は承陽庵の塔主に就いていたとされるが、その時期は懐奘禅師滅後のことであろう。このことは、寂円禅師が宝慶寺に住している時に、瑩山禅師が宝慶寺で寂円禅師のことを塔主と称していることから解せられること

である。寂円禅師は、師である懷奘禅師がかつて永平寺において師道元禅師の塔主であったから、この役職を宝慶寺に住持している時に継承したと推察される。

次に、寂円禅師には語録が遺っていない。故に、寂円禅師の嫡嗣義雲禅師の語録・伝記史料から、その人物像を考察した。

語録の中の寂円禅師に対する賛には、寂円禅師が到達した禅の境地とその教えが義雲禅師に伝わったことが記述されている。一方、伝記史料には、寂円禅師の下に参じた者は多かったが、寂円禅師はただ独坐するのみであったことから、その機に契う者が少なかったことを伝えている。このように、義雲禅師の語録と伝記史料には、寂円禅師が坐禅に徹した人物であることが記録されている。

ところで、寂円禅師に関する二つの伝承が江戸時代以降に伝えられている。一つは、寂円禅師が永平寺の閏位の三世とされていたことである。玄透即中の「世代改」によって、寂円禅師は三世から外れることになったことについて論じた。もう一つは、「如浄禅師頂相」の賛の智琛という名が、寂円禅師のこととされたことである。寂円禅師が宋国人であるとは断定できないことや、寂円禅師には智琛という名があったことを立証する史料が遺っていないことから、智琛は別の人物ではないかと考えられる。

第三章では、宝慶寺に所蔵されている「知円沙弥等寄進状」と「円聡沙弥寄進状」をもとに、宝慶寺が開創された経緯について論じた。

はじめに、宝慶寺に所蔵されている二つの「寄進状」の中に記載されている人物が、如何なる人物であるかを検討した。「円聡沙弥寄進状」の中には、十人の法名が含まれている箇所がある。この部分を通して、知円が宝慶寺を開闢した人物であることや、宝慶寺は伊自良氏と同氏に関係する氏族によって支えられていたことについて考察した。

また、義雲禅師の法嗣である曇希禅師が晩年に行った開版事業を通して、永平寺・宝慶寺に入院した人物が、伊自良氏の出身者である可能性についても言及した。「円聡沙弥寄進状」には、寂円派の嗣承についての記述がある。これは、伊自良氏が宝慶寺の寺院運営にまで干渉したこととみるよりも、宝慶寺に住している者が伊自良氏の人物であるから、嗣承のことが「寄進状」に記されたのではないかと考えられる。そして、一族の菩提を祀るために宝慶寺を創建した伊自良氏の知円は、寂円禅師と同一人物であると比定した。

次に、伊自良氏が寄進を行った敷地のことを中心に考察した。伊自良氏が宝慶寺に寄進を行

った敷地は、伊自良氏の知行地であることを明らかにし、更に「知円沙弥等寄進状」の四至の範囲内に、現在の宝慶寺の伽藍が建立されていることを証明した。

『洞谷記』に依れば、瑩山禅師が弘安五年（1282）に宝慶寺を訪ねている。つまり、この時には宝慶寺の伽藍が造営されていたことになる。「知円沙弥等寄進状」が成立した正安元年（1299）における知円等の寄進は、伽藍が建立された後のことになる。宝慶寺が創建された時には、宝慶寺の境内地が伊自良氏の所領であったのであり、その後、知円等が行った寄進によって、境内地は宝慶寺領となったといえる。

第四章では、寂円禅師が宝慶寺以外に開いたとする伝承がある、妙法寺・真善庵・白蔵庵の三箇寺のことについて論じた。

寂円禅師には、福井県下に妙法寺を開いたという記録がある。妙法寺については、これまでに越前市妙法寺町に存在していたとする説がある。しかし筆者は、白山信仰に関する勝山市遅羽町比島にこの寺が創建されたと論考した。それは、宝慶寺に白山信仰に関する「比丘尼明輪売券」が所蔵されていることや、宝慶寺の南方にある白山神社の傍らには白蔵庵が建立されていたと伝えられていることなど、寂円禅師と白山信仰が無関係とは言い難いからである。平泉寺白山神社には、天文六年（1537）にまとめられた「霊王山平泉寺大縁起」が所蔵されている。この中には、平泉寺四至についての記述があり、乾の方角には比島観音が位置する。比島観音の周辺には、仏教に通じる“妙法”を冠した地名が残っていることから、比島には白山信仰に関連する妙法寺が存在していた可能性がある。ただし四至について、「霊王山平泉寺大縁起」以外には室町時代以前に遡る典拠がなく、寂円禅師在世時にこの四至が成立していたのかは解明すべき点である。

次に、寂円禅師が土橋という場所に、真善庵を開いたと伝えられていることについて取り上げた。寂円禅師の伝記には、真善庵のことが記載されていない。しかし後世、真善庵は宝慶寺末寺の曹源寺の前身の寺院であったとされるようになる。この説を検証して、寂円禅師が真善庵を開創した可能性を探ることにした。曹源寺は、はじめに岫慶寺の近辺で創建された。この場所は、土橋であったことが認められる。しかし、ここに真善庵と号していた寺院が存在していたことについては、現在のところ不明である。また、現在の曹源寺の所在地にかつて寺院が存在していたのであれば、その寺院についても曹源寺の前身の寺院とみることができる。曹源寺が移転する前に、かつて、どのような寺院が建立していたのか不明であるが、曹源寺の近辺

には徳正寺が建立されていたという記録が遺っている。徳正寺が土橋にあったとは断定できず、またこの地が仮に土橋であったとしても、ここに真善庵が存在したという記録も見出すことはできない。

第三に白蔵庵は、寂円禅師が弘長四年（1264）に白山神社の別当として、万霊塔の南の地に建立した寺院であったと伝えられている。しかし、寂円禅師が白蔵庵の開山であることを立証できる史料は遺っていない。故にここでは、江戸時代に大野市佐開地区へと移転をした、白蔵庵の現状について取り上げることにした。白蔵庵は文政三年（1820）九月に、佐開で再興されたという記録がある。現在、佐開には「釈迦堂」と号する一字があるだけで、釈迦堂の周辺には、伽藍があったと推測できる礎石が残っている。佐開で再興した白蔵庵は、昭和前期に泰嶽伯道が住した後、現在に至るまで無住となっているため、詳細は不明のままである。

以上、寂円禅師の伝記と伝承を中心に研究と調査を行い、本論（全四章）に成果をまとめた。